



# 干し柿ビールでサルが去る

## 農地から放置柿に及ぶ鳥獣被害

毎年、全国を騒がせている鳥獣被害。その被害は、農村部だけでなく、住宅街の多い都市部にも及び、年々その範囲を拡大させている。尾花沢市の東南部に位置する細野集落。集落内の自然・文化・歴史・景観等の資源の活用と都市と農村の交流により、集落の活性化につなげていくことを目的に「清流と山菜の里ほその村（以下、「ほその村」という）」という団体が活動している。この集落の周辺の農地でも、サルやクマによる被害が発生している。近年では手入れの行き届かなくなった柿や栗等の庭木にまで及んでおり、それが農地に鳥獣を呼び寄せ一因になっている。ほその村代表の五十嵐幸一さんは、いずれその被害が住民にも及ぶ危険性を考慮し、手始めに放置柿の対策に乗り出した。

## 干し柿ビールへの挑戦

令和6年、五十嵐さんは収穫した柿の新たな活用法として、県内の様々な食材を副原料にクラフトビールを醸造する「Brewlab.108」(フューラボ・トウハチ)の加藤克明さんにビールに加工できないか持ち掛けた。今回使用する柿は、鳥獣被害対策を目的に実が熟す前に収穫するため、干し柿に加工してからビールにする工程とした。しかし、加藤さんの醸造所では、試作品を造る設備はなく、初めての試みでも一発勝負となる。成功する保証のない挑戦に、ほその村では、集落等の新たな取組の立ち上げに支援する県の事業「山形県元気な農村づくりスタートアップ支援事業」を活用することにした。

結果的に、12 kgの干し柿は、無事に1,000本のビールへと生まれ変わった。ほその村の女性グループ「友輪会」が運営する農家レストラン「蔵」での試飲や、今年の3月には道の駅ねまるや尾花沢市観光物産協会等での試験販売も行われた。干し柿特有のほんのり甘い香りと、やわらかい飲み口が楽しめるビールが完成し、特に女性に好評となった。

## 継続していくために

柿が熟す前に収穫したところ、毎年、放置柿を狙って現れるサルがその年は現れず、田畑を荒らす被害も少なくなった。放置柿をなくすることが鳥獣被害対策に繋がるといふ成果を得たほその村は、更なる柿の活用法も検討。農家レストラン「蔵」で天ぷらにして提供する干し柿の増産や、新たに柿渋作りにも挑戦している。

また、庭木の日常的な管理もほその村では引き受けている。しかし、住民の高齢化に伴い放置される庭木の量が増えており、管理するメンバーの負担が大きくなっている。今後、活動を続けていくためには、管理対象を絞ることも必要となった。そのため、所有者の意向を聞くアンケートを実施し、管理できない樹木は伐採した。伐採した樹木は、地元の小学生や観光客向けのナメコの植菌体験用に活用していく予定だ。

放置されていた庭木を活用しながら、集落の活性化につなげていくよう最善を尽くし、五十嵐さんたち、ほその村の挑戦は続いていく。



ほその村代表 五十嵐幸一さん

## 「Brewlab.108」とは？

加藤克明さん・佐織さん夫婦が営む小さな醸造所。「Brewlab」は、英語の「醸造」「Brew」と「研究室」の略称である「lab」を組み合わせた造語。「108」は、煩惱の数と同じ108種類のテイスト作りを目指していることから。現在18種類のクラフトビールを生み出している。



## ビール瓶のラベルデザイン

鳥獣被害対策の意味を込めて、平安時代の絵巻物「鳥獣人物戯画」を模し、柿にいたずらするサルを五十嵐さんが追いかける様子がコミカルに描かれている。

## ビールの番号の意味

製造順ではなく縁のある番号をつけている。今回は、五十嵐さんの名字からとって「#五十」。

